

かぞくのほなし きむら あきこ

第六話 部屋と椅子とわたし

久しぶりに、二人で暮らしている娘たちの部屋に行ってみた。相変わらず、仕事に就活に忙しい娘たち。それに加えて、片付け下手の私の娘たちらしい部屋の乱雑さがあった。散らかり様を見ながら、服屋敷（服が散らかっている）、プリント屋敷（プリントが散らかっている）、などと互いに笑いながらからかっていた。すると、娘たちが、「お母さんの部屋は・・・」と言いかけた。はて？今の私の部屋は、割ときれいだし、片付いているから、〇〇屋敷なんて揶揄はできないはずだ。すると、娘たち曰く、「お母さんの部屋は、椅子屋敷。一人暮らしなのに、椅子ばかりある。」と言うのだ。そういわれると、確かにと頷けた。

一人で暮らすようになって丸3年が過ぎ、1年前には、3LDKから2LDKの部屋に引っ越しをした。引っ越しの時に、随分と断捨離をしたから、今の住まいはシンプルで物が少ない状態をキープできている。元々、片付けるのは上手ではないから、物は少ない方が管理しやすい。お陰さまで、広々した空間は居心地が良い。娘に言われたように、2LDKに一人暮らしをしている割には、椅子の数は多い。そのどれもがバラバラな椅子。どれも、安価な椅子なのだが、それぞれに思い出のある椅子なのだ。

例えば、食卓テーブルに合わせているのは、2つの椅子。一つは、テーブルとセットになっていた椅子。4脚あったものの、少しずつ不具合が出てきて、残って使っているのは、1脚だ。安価な食卓セットの成れの果て、と言ったところ。それでも、この安価な食卓テーブルのセットは、十数年前に、独立開業した事務所部屋に、来客があった時に対応できるように、と買ったものなのだ。そんな理由で、捨てられずにいる。集成材の天板はぶよぶよしてきているし、椅子だって座り心地が良い訳でもない。でも、捨てられずに使っている。

そして、もう一つは、こちらも安価なテーブルセットの椅子だ。亡き父が、自分専用の晩酌スペースにしたい、と使っていたもの。父が使わなくなったのを機に、作業用としてもらってきたものだ。あちこちのビスが緩んでは、ガタガタするけれど、父が使っていた、と思うと捨てられない。たぶん、私が生きているうちには捨てないだろう。

台所には、シンプルなスツールが一つある。これも、千円程度で買ったものだ。台所で煮炊きの待ち時間に座っている。最近は、一人ご飯を台所でそのまま食べてしまうこともあって、そんな時には特に重宝している。



居間には、違う種類のパーソナルチェアが2脚ある。リクライニングが可能な椅子は、一人で映画などを見る時に座っているし、造りが大きめの椅子は、ゆったり座りながら、小さなテーブルと合わせてパソコン作業や、オンライン講座などを受ける時に使っている。やはり、どちらも、安価な椅子なのだが、自分だけのための贅沢な椅子のようになっている。そして、その脇にある、小ぶりのスツール。花台にしている。北海道の刑務所で作られたもの。刑務所で作られた作業品はとても質が良い。座面が小さいので自分が座ることはないのだけれど、これも椅子なのだ。

そして、廊下にある、唯一「ちょっと良い椅子」。リトルミイが座っているもの。同い年の従妹の家で使われていた食卓テーブル用の椅子だ。子どもの頃、遊びに行くと、洋風な食卓テーブルがとても格好よく見えた。母方伯母が使わなくなったものを、母がもらい、そのデザインが気に入って、1脚母のところからもらってきた椅子だ。17世紀後半に、イギリスの地方で生まれた、ウィンザーチェアと言うらしい。この椅子の座面は集成材ではないようだ。だから、

重い。そして、堅い。ただ、今の私の部屋の色合いとは系統が違うので、居間には置けず、普段は廊下に置いている。人が集まった時だけ登場する椅子だ。

ここまで見ると、一人暮らしには、持て余す数の椅子なのだが、まだ、ある。廃校になった学校からもらってきた、学校椅子。家の中に5脚ほどある。洗面所、寝室、居間の片隅の物置用、テレビ台としてなどなど用途は多岐に渡っている。



こうしてみると、やはり、娘たちが言うように、我が家は椅子屋敷だ。一人暮らしなのだから、私が座る椅子以外は、すべて「エンプティチェア」だ。でも、どの椅子にも思い出や、思い出入れがあるから、座るたびに違う景色が見える。

娘たちが言うには、「お母さんは、寂しがり屋だから、椅子をたくさん置いているのだよ。」「家に誰か来て欲しい、そういう心理があるのは、寂しがり屋ということだよ。」と。「そんなことはないけれど」と思いつつ、空っぽの椅子にあの人やこの人が座っていることを無意識に感じているのかもしれないなあ。私は、寂しがり屋か・・・ふと、父の椅子に問いかけてみた。

「寂しがり屋でもいいじゃないか」と、父の声が聞こえた。

おわり

